

令和3年度 青少年教育施設を活用した不登校対策事業
第1回 ふれあいキャンプ 事業報告書

担当：沼野

1 事業概要

- (1) 趣 旨 青少年教育施設において、学校生活に悩みをもつ児童生徒を対象に、学習活動、自然体験活動、集団活動、仲間との交流を図ることで新たな自分に気づき、周囲との関係について学び、自分を見つめ直そうとする機会の提供に資するもの。
- (2) 対 象 不登校の小中高生で、本人の参加意志のある者20名程度
- (3) 実施期日 令和3年7月3日(土)～4日(日)
- (4) 実施場所 香々地の青少年の家
- (5) 参加者数 29名(児童生徒 8名、保護者・スタッフ等22名)
- (6) スーパーバイザー 大分大学准教授 溝口 剛 氏
- (7) 支援者 大分大学学生12名
- (8) プログラム

7月 3日(土)		7月 4日(日)	
時刻	活 動 内 容	時刻	活 動 内 容
12:00	受付	7:00	起床、洗面
13:00	出合いのつどい(アイスブレイキング)	8:00	朝食
14:00	活動1「新しいかだ活動にチャレンジ」 ※手作りいかだを協力して操作する	9:00	部屋点検
15:30	わくわくタイム(選択活動)	9:30	活動2「ジャム作り」 ※イチゴ、リンゴを使ってのジャム作りを体験する
17:30	夕食	11:00	わくわくタイム(選択活動)
19:30	【保護者懇談会 ～20:30】	12:00	昼食
21:00	入浴	12:40	別れのつどい
21:30	就寝準備	13:00	解散
22:00	就寝		

①出合いのつどい「アイスブレイキング」(視聴覚室)

出合いの集いは参加者と大学生ボランティア(以下、メンタルフレンド)の出合いの場もある。参加者の不安や期待を考えつつ今回は、メンタルフレンドに「マイヒーロー マイヒロイン」をテーマにスピーチを行ってもらった。メンタルフレンドは、子ども目線で話をし、参加者も話を熱心に聞いていた。参加者との距離も縮まった。出合いの集いでした。



(写真1) MF 自己紹介の様子

②活動1「イカダ活動にチャレンジ」(キャンプ場)

香々地青少年の家の職員でつくった2人乗りのイカダ活動を行った。テレビでもイカダを使った無人脱出を行っているの、子どもたちも興味を持ち、参加できると考えたプログラムである。今回は、メンタルフレンドとペアになって実施し、親睦を深めることも考えた。当日は、大雨の中、会話も聞こえない状況であったが、子どもたちにとっては過酷な状況の中であったが、大声を出しながらこのプログラムを楽しんでいた。思い出に残るものになったようだ。



(写真2) 雨の中のイカダ活動

(写真3) MFと一緒に

③「わくわくタイム」(レクリエーション室・創作室・談話室)

わくわくタイムは、自分で遊びや活動を選択できる活動、自己決定の場として設定している。メンタルフレンドが、子どもたちに積極的に働きかけ、バトミントンやミニテニス、ドッチビーなどで声を掛けあって遊んでいる姿が見られた。最初は数名であったが、楽しく活動している声が聞こえると、多くの参加者が集まってきた。他にオセロ、トランプ、カードゲームなどの遊びを通じて、笑顔が自然と出るなどコミュニケーションが深まる様子が見られた。活動時間が終了したときには、全員で協力しながら片付けができた。今回は、わくわくタイム時間にネイチャークラフト、傘袋ロケット、かき氷のコーナーを設けた。



(写真4) MFとボードゲームを楽しむ



(写真5) MFと卓球を楽しむ



(写真6) キャサリンのかき氷



(写真7) いちさんのネイチャークラフト

④「保護者懇話会」

保護者・施設職員・アドバイザー7名の参加(初参加保護者1名)があった。現在の子どもの様子や悩みが語られ、思いを共有する場となっている。

⑤「メンタルフレンド会議」

1日の子どもたちの様子や、MFの振り返りの場として設定している。子ども同士のつながりづくりを考えて翌日の班編制の変更も話し合われた。

⑥活動2「ジャムづくり」

延期前のプログラムで計画していた、香々地青少年の家で野いちご狩りをし、ジャムづくりから食するまでの流れは、参加者がやりたかったとのリクエストもあった。そこで、時期がずれたため香々地で採れた野いちご・梅を冷凍保存して実施することにした。班に別れてそれぞれが、イチゴ、野いちご、すもも、ウメのジャムづくりに挑戦した。どの班がどのジャムづくりに挑戦するかをくじで決めた。同じ班の仲間やMFと相談しながら、全員がジャムづくりに関わることができた。

自分たちがつくったジャムや他のグループのジャムとの味比べをし、参加者同士の交流も深めることができた。



(写真8) 野いちご・梅・すもも・イチゴ



(写真9) ジャムづくり

⑦別れのつどい(まとめ・振り返り)

集いの前に参加者は、アンケート用紙を使いまとめ・振り返りを行った。メンタルフレンドの感想発表、また、参加者の感想発表が行われた。参加者の感想では、ふれあいキャンプで楽しい思い出ができたこと、メンタルフレンドさんへの感謝の思いが発表された。参加者から次も参加したいという声が多く聞かれた。



(写真12) 別れの集い

(9) 事業評価

第1回ふれあいキャンプへのアンケート結果(データ対象7名)

○参加者
プログラムについて

	内容	楽しかった	少し楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
①	新イカダ活動にチャレンジ	5	0	0	0
②	わくわくタイム	7	0	0	0
③	野いちごジャムづくり	7	0	0	0

※ ① 未実施2人

自分の事について

	内容	できた	少しできた	あまりできなかった	できなかった
①	積極的に取り組む事ができた。	5	1	1	0
②	MFと話ができましたか	5	2	0	0
③	キャンプを楽しむことができましたか。	7	0	0	0
④	まわりの力をかりずに活動できましたか。	4	1	2	0

○MF
参加前と後での変化について

	内容	4 (大)	3	2	1 (小)
意欲	活動に最後まで意欲的に取り組んでいた。	7	5	0	0
コミュニケーション	MFや仲間に積極的に取り組んでいた。	5	3	4	0
自己肯定感	活動に主体的に取り組んでいた。	4	5	2	0
自立	MFや大人の力を借りずに活動できた。	4	7	1	0

自己肯定感 未1

2 成果と課題

(1) 成果

◎ プログラムについて

- すべての活動に参加者全員が楽しかったと答えている。
- 雨天の中でのイカダ活動は、家庭の中で生活する参加者にとって新鮮なものであった。また、MFとの交流を図る意味において、初日のプログラムとしては有効的なものだった。
- メンタルフレンドは、子どもたちに積極的に話しかけ個別に向きあい、各活動においても意欲的に支援していたため、一人ひとりに細かな対応ができ、最後まで全員がキャンプに取り組むことができた。
- 保護者懇話会は、子どもたちの現在の家庭・学校での様子や保護者の思いを聞く場となっている。参加者の思いを共有し、共に考える有意義な場となっている。
- 「わくわくタイム」は自分の好きな内容でMFと交流できるため、参加者全員が楽しく実施できている。家にこもりがちな不登校の子どもたちの自己決定の場としてこれからも実施していきたい。
- わくわくタイム時にかき氷を配布した。暑くなった体を冷やす事や、仲間と一緒に食することで一体感もでき、よかった。
- 夕食・朝食・昼食と3回の食事を行った。自分の食事だけでなく、ごはんや汁物の準備など協力して行うことができた。また、食事の前後に、そろって「いただきます」「ごちそうさま」を行った。仲間の準備が整うまで待つ姿を見せてくれた。
- 小学3年生から高校2年生と幅広い年齢層であるが、MFのきめ細かい対応と無理のないプログラムによって違和感なく実施できた。
- MFのアンケートでは、参加前後の子どもたちの変化について回答してもらった前後の変化が大きい内容の1つとして意欲、コミュニケーションがあげられた。少ない人数の中ではあるが、同じ悩みを抱える子ども同士をつなげるとりくみができることはよかったように感じた。
- MFのアンケートには、子どもが活動の中で変わった様子や場面が記述されている。参加者のそばで気持ちに寄り添いながら活動を共にするMFの存在が参加者の気持ちの変化を促している。

(2) 課題

- 今回、延期やコロナの状況下、7名の参加があった。昨年からの参加者4名、新規参加3名であった。新規参加の2名は、宇佐市の「せせらぎ教室」からの参加で、支援センターへの訪問をきっかけに参加であった。ふれあい広場の広報をもっと行わなければならない。
- 参加者アンケートでは、すべてのプログラムに対して「楽しかった」と答えているが、自分についてのアンケートでは、「キャンプを楽しむことができた」については全員ができたというのに対して、意欲、コミュニケーション、自立に関しては厳しい評価をしている。
- 保護者から子どもだけでの参加希望があった。参加者の自立を保護者は持っている。MFや大人の力をかりず活動では、まだまだ課題があるように思う。